

『サロメ』受容の一コマ

石 崎 等

(立教大学教授)

日本の文壇・劇壇において『サロメ』が最ももてはやされた時代は、若月紫蘭と中村吉蔵の二人が相次いで翻訳刊行した大正2年を中心として、明治末から大正にかけての10年ほどではないか。紫蘭訳の『サロメ』(6月15日、現代社)は、「近代脚本叢書」第四篇として刊行され、ピアズレイの挿絵写真二葉、舞台写真二枚、「ワイルド小伝」「サロメについて」「ワイルド著作目録」を取めている。紫蘭はこの訳にあきたらず大正10年に改訳を極光社から刊行している。吉蔵訳のほうは、その年の12月2日から26日まで帝国劇場で開演された、芸術座臨時興行のために訳されたものである。11月南北社から刊行され、のち天佑社版『ワイルド全集②』(大正9年4月)に収録された。

『サロメ』の翻訳の嚆矢は、明治42年の小林愛雄訳『悲劇サロメ』(3月『新小説』)。次いで森林太郎口訳『戯曲サロメ』(9~10月『歌舞伎』)が登場することにより、世紀末ブームに乗ってワイルドの文業がようやく紹介され始める。小林訳は不明だが、鷗外訳のほうは1905年にヘドウィヒ・ラッハマンがドイツ語訳(リヒャルト・シュトラウスが歌劇化して有名)したものを用いている。

ただそこに至るまでには下地が必要だった。纏まったものとしては鷗外の「脚本『サロメ』の略筋」(明治40年8月『歌舞伎』)が早く、次いで藤井健治郎の談話「独乙世界瑣談」(明治40年12月『早稲田文学』)が水先案内となっている。鷗外のは、聖書の典拠、登場人物一覧、梗概、作者紹介と親切極まりないものである。また藤井のものは、二年間のドイツ留学の土産話としてなかなか貴重なものである。1906年の段階で『サロメ』のドイツ語訳が三種類あったとは驚くべきことであろう。梗概もほぼ的確であり、その「多大の詩趣」は読者に興味を抱かせたに違いない。しかしこれらは本格的な作家論にはほど遠く紹介や感想の域を出ていない。約3年後『早稲田文学』誌上に本間久雄の「オスカー・ワイルド論」(明治44年3月)が登場することによって、ワイルド理解は急速に深まる。本間のものは、のち『ワイルド全集①』(大正9年5月)の巻首を飾る。

日本における1910年代のワイルド受容にしばらく目を向けてみると、本間訳の『獄中記』(明治45年7月、新潮社)『遊蕩児』(近代名著文庫第三編、大正2年4月、同)、谷口達訳『架空の頽廃』(大正2年6月、新陽堂)などがあり、また入門評伝としては貴志二彦『ワイルドの二重人格』(カナメ叢書第六編、大正3年9月、梁江堂書店・杉本梁江堂)

などがある。翻訳はその後大正年間に生田長江、佐藤春夫、相馬泰三などによって相次いで試みられている。

しかしこの時期、『サロメ』に対する最も重要な理解者として島村抱月の存在を第一に挙げなくてはならない。すでに触れたように、抱月は、大正2年12月、松井須磨子と旗揚げした芸術座で『サロメ』の演出を手掛けている（大正5年に明治座での再演、研究劇を含め、上演回数は、『復活』の444回、中村吉蔵の『刺刀』の335回に大きく水を開けられているが、127回と第3位をキープしている）。演出に対する彼の考えは、『『サロメ』上演に就て』（大正2年11月19日『時事新報』）と『『サロメ』一面観』（大正2年12月『創造』）に表明されている。『サロメ』の上演を巡るこうした動きが、『サロメ』に関する正しい議論を引き出すきっかけとなったことはいままでもない。

二番目として、英文学者・評論家としての本間久雄の存在であろう。先に示したワイルドの翻訳紹介、「オスカー・ワイルド論」などの評論活動は特に傑出しており、世紀末耽美主義文学の研究者としての力量が示されている。本間は、ワイルドの生涯と芸術に「人生対芸術といふことに就いての意味深き一つのシンボル」を読み取ろうとした。

別の角度からワイルドを見ようとした文学者もいた。〈人生に触れる〉ことに抱溺した自然主義者のうち、粗雑であったが英文学に明かかった岩野泡鳴は、明治41年9月号の『太陽』に「詩人オスカー・ワイルド」を発表し、評論や『獄中記』にこめられた思想、あるいは詩人としてよりもむしろ社会喜劇の作者としてのワイルドに目を向けようとした。これはイギリスにおける当時の評価、わけてもイングレヴィなどの説に拠ったのではないかと思われるが、偏ったワイルド観を相対化する意味で貴重なことであった。明治42年1月号と2月号の『早稲田文学』に発表した「オスカー・ワイルドの劇『キンダーミーヤ夫人の扇』」「ワイルドの社会喜劇『熱心の大切な事』」の解説ならびにあらすじの紹介はその意味でもっと重視されてよい。

三番目としては、日本で最初の美学者として知られている大塚保治の存在である。彼は、大正4年9月から8年7月まで、東大での文芸思潮論の講義をボードレールとワイルドに限って展開した。大学における耽美主義の紹介としては画期的なものと思われるが、時代がそれを要請したといえなくもない。

その頃学生だった芥川龍之介の読書体験が何よりもそのことを証明している。また志賀直哉は、鷗外と同じラッハマン訳『サロメ』を読んでおり、そのワイルド体験を『鳥尾の病氣』という短編に書いている。また吉田紘二郎は、ボストン刊の1907年版『サロメ』を所蔵していた。

遺著である『文芸思潮論 大塚博士講義集Ⅱ』（昭和11年3月、岩波書店）を通して見る限り、大塚の講義は、本間久雄などに比べればはるかに浩瀚なものといえる。しかもアカデミックな立場によって貫かれている。彼の目的は唯美主義の長所と短所を体現してい

るワイルドを材料にして唯美主義の原理を解明することであった。ここには美学者としての大塚の持ち味が遺憾なく発揮されている。構成は「序説」「第一章 ワイルドの生涯」「第二章 ワイルドの人格」「第三章 ワイルドの作品」より成り、『サロメ』については、第三章の最後の所で言及されている。マッセナーの歌劇『エロディアード』（1881）やフローベールの『エロディアス』（1877）と比較しながら、ワイルドの独自性を分析し、本間のものより一歩も二歩も進んでいる。そこに展開されたサロメ像は、「感性・本能・衝動の激烈な女」「理智の発達した、意志も強い人間」「猶太の王の姫としての自覚が強く、自我意識が明白に現れてある」「文化の爛熟から生ずる変種である、*décadent*である」とされ、「恋愛の悪魔的な方面」が強調されている。しかし『サロメ』を気分芸術・メロドラマと見ようとしている点などは、ワイルドに劇作家としての才能を認めようとしなかったこととともにやや浅薄な感じがしないでもない。このあたりに大塚のワイルド理解の限界があったといえるだろう。

なお、最初に書かれたフランス語からの翻訳は、『対訳詳註サロメ』（大正13年10月、白水社）ではないかと思われる。訳者は今日『星の王子さま』の訳者として知られている内藤濯と宮原晃一郎の二人。語学教材としてだからちょっと驚かされる。1908年10月にリヨンで上演された台本に拠ったものである。

